

薬剤師生涯研修の基本理念の共有、受講者の意識形成

—特に手段の目的化に陥らないこと—

内山 充

何事によらず、仕事のプログラムと行動には、その「基本理念」として、何を目指しているのか（目的）、どのような意識の持ち方をするのか（志向）、さらにどのような経過や成果を尊いとするのか（価値観）がある。そして片や具体的「方法論」として、手段や材料、参考とすべき前例等がある。両者いずれが欠けても全体のプログラムは円滑に成就しない。特に基本論はプログラム関係者が観念を理解し、共有していなければ成功はおぼつかない。一方、方法論にはいくつもの選択肢がある。最適で最善の手段を選択することが目的の達成に有効な道であることは明らかである。

薬剤師にとって、生涯研修による自己研鑽が、専門家として生きる上で必須な日常行動であることは既に広く認められ、様々な研修の場が提供されている。その最終目的は、薬剤師が、地域および臨床の場での医療の向上と患者の便益に貢献するための、優れた職能を身につけることにあるのは言うまでもない。その最終目的に向かって、薬剤師に共有してほしい基本理念として、当認証機構は本コラムを通じて、生涯学習の『[基本条件と、望ましい学習環境](#)』、および『[目標：生涯学習社会の実現—その形と行動](#)』を提唱し、さらには目的達成のための研修の受講および提供の勧めとしては『[研修の新パラダイムCPD](#)』、『[ルールと判定によって成長を](#)』などを随時紹介してきた。薬剤師生涯研修の成否は、関係者間の基本理念の共有と、受講者の意識程度・行動意欲に懸かっていると一言では言い切れないからである。

生涯研修は大学教育と異なり、主体性は受講者にある。しかし、若し受講者が生涯学習の基本理念や取るべき手段等について、大学等で十分な意識教育を受けていないならば、それらは、生涯研修の場で習得しなければならない。その意味で、当認証機構の認証した生涯研修実施機関（プロバイダー）をはじめ全ての生涯学習関係者には、それぞれ独自の構想とプログラムに基づく研修を実施すると同時に、上に述べた基本理念や学習手段についても、関係者が共有し得る観念形成のための協力をお願いしたい。

受講者の陥りやすい過ちに「手段の目的化」がある。肝心の最終目的を忘れて、目の前の手段の成就に心を奪われる過ちである。競争社会では様々な場面で手段の目的化がしばしば起こる。特に自ら真摯に努力する専門家になればなるほど陥りやすいと言われている。

生涯学習の場では、単位や認定の取得は目的達成の一里塚として必須ではあるが、あくまでも手段であり、決して目的ではない。受講者は、認定の取得や維持だけを目的として学会や研修会で単位を集めるなど、学習が身に付いたという実感が伴わないような単位を集めたり、認定証を受けたりすることで満足してはならない。信頼できる実施者の行う実質的で役に立つ内容の研修で単位を取り、認定証を受けるべきである。これを実践するためには、自分がどのような専門性や職能を確保したいかを明確にすることが必要であり、そして、その自らの目的・計画に沿った望ましい研修成果を獲得して、人々の期待に応える活躍をしていただきたい。

（注：本稿では「学習」を、「研修」以外の方法も含むやや広い意味で、区別して使用している）

(2011. 10. 5)